

津村信夫「鄙の歌」補遺

工藤 茂

津村信夫は昭和十九年三十五歳の若さで亡くなった詩人である。その詩に次のようなものがある。

指呼すれば、国境はひとすじの白い流れ。

高原を走る夏期電車の窓で、

貴方は小さな扇をひらいた。

爽やかな抒情、新鮮なイメージが印象的なこの詩は、「小扇」と題する彼の代表作と目される詩である。そしてこのような表現は彼の他の詩、たとえば以下のような詩にも見られ、彼の詩を特色づけている。

私は夜が信じられない。その黒い手袋が信じられない。

(味爽)

ドビュッシイが私に嘗つて庭を与えた。私はこの庭にながらく住まへるであらうか。(花樹)

一つの窓は罅戸で閉されたまま久しく落日の的になつてゐた。

秋は少しづつ樹々を振つた……(夕暮)

久しい間 疎林の中を月光が縫つてゐた

樹々の葉は落ちつくし やがて凍てついていった この寒げな銀の線路は 涯しなく林の中を貫いてゐる

(冬の旅)

一方、右のように新鮮なイメージを喚起する修辭はないが、その知的抒情が我々の心に浸み込んでくる次のような詩もある。

父を喪つた冬が

あの冬の寒さが

また 私に還つてくる

(略)

在りし日

好んで植ゑた椿の幾株が

あへなくなつた

心に空虚な部分がある

いつまでも残つてゐる

さう云つて話す 兄の声に

私ははつとする程だ

父の声だ――

そつくり父の声が話してゐる

私が驚くと

兄も驚いて 私の顔を見る

(父が庭にゐる歌)

あるいは、また、

野を踏んでくる

やさしい風が

もう昨日から吹き出した

木や風が俺の詩になつた

あの

童話時代が還つてきたやうだ

(寂しい村で)

このような詩もまた、彼の詩の特色のひとつであった。そして、これから書こうとしている「鄙の歌」も実はこの後者の、特に「寂しい村で」の詩と同じ特色を持つ詩の系列に置くことのできる詩なのである。

二

津村信夫の第三詩集『或る遍歴から』は、「新詩叢書」の第十五巻として、昭和十九年二月十五日、大阪湯川弘文社から刊行された。定価壹円五拾銭、特別行為税相当額五銭、合計壹円五拾五銭、B六版、白紙貼背厚紙表紙の本であった。詩集の発行に△特別行為税▽がかかっているのが、いかにも戦時下の発行らしい。詩人はこの詩集発刊後四か月で帰らぬ人となった。

さてこの詩集には、全部で七十二篇の詩が収められている。「その一」「その二」「その三」の構成となっている。

が、「その二」に「鄙の歌」は収められている。「その二」は全集の鈴木享の「解説」によると、以下のような特色を持つ章である。すなわち、△この章には、旅に取材した作品が多く集められている。旅といっても信濃―それも南信・北信への旅が大部分であるが、中に若干他の地方へのそれも介在する。▽

「鄙の歌」はこの解説の後者、つまり△中に若干地方へのそれも介在する▽に相当す作品である。なぜならば、次のような詩なのだから。

九州の旅に出て

私は油布の嶺を越えた

嶺の霧は深かった

麓の村の

霧のなかで

娘が水を汲んでゐた

いづこの農家の庭にも咲く

紅い叢花

霧のなかで

娘が花を摘んでゐた

身も心も淡く濡れそぼつて

村のはづれでは

若者の歌が

夕べの雲のやうに湧いてきた
歌のひとつが
唯一人の心に通ふやうにと
鹿のやうに
たくましい若者であつた

九州の旅は

私の兄元から

草に置く朝露が

陽に目覚めて行つた

私は思ひ出せない

あの一ふしの歌が

思ひ出せない

今 耳もとに囁くものは

或は かりそめの

私の感傷であらうか

——私の思ひは湯の瀧山の

朝の霧よりまだ深い……

右の詩がいつ頃書かれたかは不明である。が、その初出は昭和十二年十月に発行された『新女苑』⁽⁵⁾であるから、昭和十二年頃に創られたものと思われる。その初出詩は左に掲げようように総ルビであった。

朝の霧よりまだ深い……

九州の旅に出て、
私は油布の嶺を越えた。

嶺の霧は深かつた。

麓の村の、

霧のなかで、娘が水を汲んでゐた。

いづこの農家の庭にも咲く、紅い叢花、

霧のなかで、娘が花を摘んでゐた。

身も心も、淡く濡れそぼつて。

村のはずれでは、

若者の歌が、夕べの雲のやうに湧いてゐた

歌のひとふしが、一人の心に通ふやうにと。

鹿のやうに、たくましい若者であつた。

九州の旅は、

私の足元から、

草に置く朝露が陽に目覚めていつた。

私は思ひ出せない。

あの一ふしの歌が思ひ出せない。

今、耳もとに囁やくものは、

或は、かりそめの私の感傷であるか。

私の想ひは湯の瀧山の

詩集に収められる時に、この詩は句読点と振り仮名をす

べて除去され、長い一行はさらに行分けられて、二十一行

から三十行になつた。だが、連だけは変えられなかつた。

その異同の詳細は全集に示されているのでここでは触れな

い。ただ全集に洩れた箇所だけを指摘すると以下のように

なる。

初出詩第二連第二行「湧いてゐた」、詩集「湧いてき

た」。

同第二連第三行「一人の心に」、詩集「唯一人の心に」。

同第三連第三行「目覚めていつた」、詩集「目覚めて行つ

た」。

同第三連第六行「囁やくものは」、詩集「囁くものは」。

同第三連第七行「感傷であるか」、詩集「感傷であらう、

か」。

同第四連第一行「私の想ひは」、詩集「私の思ひは」。

その結果この詩は、詩集に収められた他の詩と同じスタ

イルに統一され、詩集の中に落着いた位置を占めることに

なつた。

三

津村信夫が信濃へよく旅をしていたことは、室生犀星の『我が愛する詩人の伝記』にも見えている。それでは、彼が

△九州の旅に出▽たのはいつのことであろうか。堀内達夫の作製した全集の年譜には、昭和三年（一九二八）二十歳の項に△「海月」時代の後は別府にも転地療養した。宿は「亀の井」だったが、病床時代は信夫はひねくれて、ちょっと扱いかねた▽と書かれている。そして、その時以外に信夫が九州を訪れた形跡はない。従ってその時の印象がこの詩に結晶したのである。全集の解説に鈴木も△作者は慶大予科生時代に肋膜炎を病んで休学し、その間別府温泉で転地療養している。この詩はその折（昭和三年ころ）の記憶に基づくものか。▽と書いている。当時の信夫のことは兄秀夫の「弟津村信夫の思い出」に詳しい。

△あの滑稽、快活な少年信夫にいつの間にか寂しみの加わり神経質になったのは、矢張り慶応予科時代に肋膜炎を患ってからであろう。（略）慶応入学の前には松本高校を受験したのだが、それが合格せず、その試験勉強も福したのである。（略）永い東大病院の生活から漸く解放されて、半歳位は鎌倉海岸の旅館「海月」で養生する身となった。（略）「海月」時代の後には別府にも転地療養した。宿は「亀の井」だったが、病床時代は信夫はひねくれて、ちょっと扱いかねた。▽

右に「亀の井」とあるのは、当時の亀の井旅館、今の亀の井ホテルの前身である。油屋熊八翁経営の旅館であった。信夫はそこで鬱屈した心を自分で持て余しながら療養にとめていて、ある日、由布院を訪れたのであろう。その時

の見聞が八、九年後に「鄙の歌」として結晶したものと思われる。

九州の旅に出て

私には油布の嶺を越えた

△油布の嶺▽というのは、『万葉集』に△豊國の木綿山▽と詠われた由布岳のことであろう。全集の解説は次のように紹介している。

△油布の嶺 大分県別府市の背景をなしている由布岳。草山の優雅な山容から豊後富士の別称がある。それを越えた西南麓の由布川流域に由布院温泉があり、そのあたりの朝霧の大観は名高い。この詩にもそれがうたわれている。

▽

由布岳が別府市の背景をなしているのは事実である。しかしそれは、大分市内からは遠望できるけれども、別府市内からは見えない。しかもその麓由布院に、別府から行くのに由布岳を越える必要はない。その上、当時信夫は肋膜炎の療養のために来別していたのだから、登山のような運動は禁じられていた筈である。とすれば先に引用したこの詩の冒頭の二行は、虚構だったことになる。従ってこの詩は叙景ではなくて、詩人の心象風景であった。嶺の彼方への憧憬、そこに展開される牧歌的な詩の世界。それは由布の嶺の麓に展開する田園風景であった。その風景の中に点

綴される二人の娘と一人の若者。若者は自分の恋人に聴かせるかのように鄙の歌を歌っている。その歌は鄙ぶりの恋の歌であった。そのような光景をみやびやか(都ぶり)に表現する詩的世界。この詩の特色はそのようなところにあると思われる。

嶺を被ふ霧、水を汲む娘を包む霧、花を摘む娘の身も心も淡く濡らす霧。それは霧であると同時に詩人のしっとりとした情感でもあった。当時の鬱屈した詩人の心を癒すところの。

△鹿のやうに／たくましい若者▽の歌う鄙の歌の一ふしは、今となっては蘇りようもなかったが、郷愁にも似た詩人の情感は、霧のように彼に纏綿している。

彼の別府、由布院体験は、八、九年後に、このような一篇の抒情詩として結晶したのであった。兄秀夫が△病床時代は信夫はひねくれて、ちょっと扱いかねた▽と述べているように、当時の信夫には鬱屈した心があった。その心がこの詩では逆に、美しい抒情となって定着している。若くして逝った詩人の手腕である。

〔付記〕

〔鄙の歌〕は津村信夫の詩を代表するような作品ではない。もっと素晴らしい詩がある。けれども彼の九州体験を詩化した作品として唯一の詩であろう。実はこの夏、「解釈と鑑賞」編集部から『近代詩歌のふるさと』の一つとして「由布岳」〔鄙の歌〕(津村信夫)の執筆を依頼された。

指定された枚数が四〇〇字詰原稿用紙六枚だったので、書き残したところが多かった。これが題名に「補遺」と付けただけである。

△注▽

(1) 津村信夫は四季派の詩人として名が知られている。

明治四十二年一月五日に生まれ、昭和十九年六月二十七日、アデイスン氏病(副腎の機能が壊れる病気)で亡くなった。

(2) この詩について『日本近代文学大事典』(昭52・講談社)は、次のように述べている。

△なかでも『小扇』は生涯の代表作で、早くも新進詩人としての評価をかちえた。(略)この詩はミルキイ・ウエイ(銀河)と渾名した、父の友人の令嬢内池省子を歌ったものだが、彼女はやがて勝田家に嫁ぎ片恋に終わった。▽(筆者、小高根二郎)

(3) 『津村信夫全集』第一巻(昭和四十九年十一月三十日初版発行・角川書店)

なおこの全集には、深沢紅子の装画があり、私にとっては懐かしいものであった。というのも、古い昔、盛岡でお目にかかったことがあったからである。ちなみにその章に収められている作品を挙げてみると、以下のようになる。

「田舎」「稲妻」「旅行者」「木の実」「みづ絵」「魚を喰べる」「鄙の歌」「千曲川」「長野」「往

生寺」「林檎園」「善光寺平」「風土によせて」

「緑葉」「早春」「戸隠姫」「戸隠人」「爐」「厨」

「吹雪」「飯山」

(5) 『新女苑』(第一巻第十号・実業之日本社)の「十月の詩画譜」欄に掲載されている。そのページは中原淳一の草花を持つ少女の絵で飾られ、二ページを使って印刷されている。

(6) ただし私の好みからすると、初出詩のスタイルの方が視覚的には勝れているように思われる。

(本学教授)